
Fate/and blacksmith

コルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / a n d b l a c k s m i t h

【Nコード】

N 4 0 8 6 Y

【作者名】

コルク

【あらすじ】

交通事故で死んでしまった彼女は、気がつくと知らない場所に来ていた。

そこで出会う不思議な人たちとともに、日常がのんびりと始まる。

F a t e / s t a y n i g h t 三ルート全てクリア済みです。h o l l o w は年齢の関係でプレイできてません。なので、いろいろおかしかったりすると思いますが、そんな時はぜひご指摘よろしくお願いします。

ブローグ

昔から、生意気な子供だといわれてきた。

相手が少しでもおかしなことを言つと、すぐに揚げ足をとって反論した。

それがただの冗談でも、そして、それをいったのが誰だろうとつかかっていった。

本当に馬鹿な子供だ。けど、そのときはそれが正しいことなんだと間違っていることは正さなければならぬと、勝手に自分を合理化して、正当化して天狗になっていた。

そんなことをしていたからだろ。周りの人たちもどんどん減つていった。

はじめは笑っていた友人たちも、一人、二人と姿を消していく。

両親さえ、わたしと話すのを嫌がるようになった。

それはそうだ。誰だつて、話すたびに口論になるようなやつと口をきいたりなんかしたくない。

それっておかしくありませんか――
それって辻褃あつてなくないですか――

あなたのいつてること変じやないですか――――
そしてその都度こんな言い方をしていたのだから、嫌われるのも当然というか。

まあつまりは、こうなったのも必然だったのだろう、ということだ。

その瞬間を、わたしはぼーっと眺めている。

小学生くらいの『わたし』が一人で歩いている。雨が降っているのに、傘も差していない。

たしか、傘がなくなっていたのだ。

一緒にランドセルに入れていたレインコートもなくなってしまっていて、仕方なくタオルを頭にかぶせて帰ったんだ。

この頃は、そんなことが毎日のようにつづいていた。

ものがなくなるのはもちろん、体操服が気づかないうちにトイレにあったり、登校してみると机の上がチョークの粉で真っ白だったり。後から考えてみると、これはやはりいじめの類だったんじゃないかと思うけど。

きっとそのときは気づいてなかったから、一人でひどく惨めな気持ちで噛みしめていた。

『わたし』はぎゅつと唇を噛んで、ぼやける視界を瞬きして何度も消しながら、前だけを見て大股に歩く。
道路の角に、誰かが潜んでいるとは知らずに。
そして、それはやってくる。

「どーん！」

「っ！」

突然、物陰から数人の小学生が飛び出し、『わたし』を車道に向けて突き飛ばした。

そのまま蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

「ははっ！おしおきしてやったぜー！・・・えっ」

幼い顔が凍り付く。

偶然、そこはガードレールのない場所だった。

車道との境目にコンクリートで小さなしきりがしてあるだけの細い道だった。

さらに道路は雨で滑りやすくなっていた。

突き飛ばされた衝撃で車道に押し出された『わたし』は、しきりにひっかかって後ろ向きに倒れ込んだ。

上半身だけがはみ出した形になる。

いてて、と『わたし』が顔をしかめ、ふと横を向いて目を見開いた。

それはどれほどの恐怖だったのだろう。

トラックが、まっすぐ自分へ向かってくるというのは。

真っ白で真っ赤な光が、恐ろしい速度で近づいてくるのが見えた。

そしてずっとこの体勢だったなら、間違いなく自分は死ぬだろうということがわかった。

けれど、誰一人として動けずに。駆けていた子供たちも、時を止めたように固まってしまつて。

・・・つと、目の前が切り替わる。

傍観者だったはずが、いつの間にか、わたしは『わたし』になつていた。

すぐそこにヘッドライトが迫る。わたしが『わたし』になつたとしても、どちらにしろこの終わりは避けられない。

いつだって、わたしは恐怖にとらわれて、この瞬間から指一本動かすことさえできやしないのだ。

どん、という音がして、視界が真っ赤になつて、そこで終わり。

ブラックアウト。

暗闇の中、また、終わりが始まる。

わたしの記憶が高速で巻き戻されていく。

トラック、傘、なくなつたたくさんのもの、そして、

――歪みきつた顔の自分。

もうやめてほしい。何度繰り返しただろう。闇の中、わたしは延々と、自分の死の瞬間を追体験し続けている。

死んだなら、とつとあの世にでも連れて行けばいいんだ。わたしが罰を受けるべきだというなら、石積みでもなんでもするから、

だから、

「こら、こんなところで何してんだ？」

「え？」

不意に、首根っこを掴まれた。

驚いて振り向くと、そこには不思議な男の人が立っていた。

黒髪に、褪せた赤い布を適当に巻き、褐色の肌の上にはのたくるようにして奇妙な模様が描かれている。

・・・というか。ここには、わたし以外はいはずなんだけど。

ぽかんとして見上げると、彼は眉を顰めてわたしをにらんだ。

「んー？お前、人間か。つかしいな、ほんと何でこんなところにいんだ？迷子なんて嫌だからな、俺」

「ま、ま、迷子？えと、違う」

「違う？じゃあどうやって来たんだ。そんななりで、本当は超凄い魔術師だったりするわけ」

まじゅつし？

「なに、それ」

「・・・」

「え？な、なに？」

彼は半眼になって黙り込んだ。

呆れているようにも見えるし、怒っているようにも見える。

「・・・まじで？知らねえの？」

「うん」

「・・・はー。嘘だろ・・・」

額に手を当てて唸り出す。ため息をつき、じとーとわたしを見やる。

「・・・消滅させるかあ？それもそれでまずいか。けど、ああ・・・」

ひとしきりうんうん唸ったあとで、彼は何かを思いついたようでは

んと両方の手のひらを打ち合わせた。

「お、そうだ！」

「なに？」

「いいこと思いついたっ。あいつんどこに押しつけられればいいじゃん
あいつ？」

「あいつって？ていうか、押しつけるって」

「細かいことは気にすんな。そーだよ、あいつ一応正義の味方なん
だから人間一人くらいどうってことねえよな、うん。

な、俺天才？」

「え、知らない」

「ノリという言葉を知るのがいい。そんじゃ送るぞー」

「はっ！？待って、訳わかんない」

何なんだこの超展開！頭がついていかないって！

混乱して、思わず彼の腰布にがっしとつかまる。

わたしを見下ろして、なぜだか彼は苦笑したようだった。

「・・・俺にすぎるか。無知っていうのはすげえよな」

「？」

「いーや、何でも。けど、そうだな。お前を押しつける相手は悪い
やつじゃないから、安心していいと思うぜ。

むしろ、スッゴイお人好し。超がつくくらい」

「そ、そうじゃなくて」

「人間がここにいちやまずいんだよ。精神がとけちまう。後始末す
んの俺だから、とっとと出てってもらいたい。時間がたちすぎ
ると手遅れになるからな」

「精神が、とける？」

それは、いったいどういうことなんだろう。

脳みそがなくなってしまうということなんだろうか。それなら、こ

の男の人にも危ないんじゃないのか。

「俺はいーの。それより、そら、道は造った。あっちに向かって行けばいい」

「え・・・？」

彼が指さした方を見ると、確かに明るい光が見えた。

さっきまで真っ暗だったはずなのに、いつの間にそれはあったのか。

「ほら、いけって」

どんと背中を押されて、わたしはたたらを踏んだ。

どうやら、考える時間もくれないらしい。

でも、一つだけ聞きたいことができたのだ。

「あ、あの、さ」

「あ？」

光に飲み込まれる寸前で足を止めて、ふりかえる。

彼はすでに一仕事終わったといわんばかりにくつろいでいた。

いいけど、へそのごまは取らない方がいいと思う。おなかが痛くなるし。

「あなたの名前、なに？」

「あー？そんなの、どうだっていいだろ」

「聞いておきたくて」

「ふーん・・・」

彼はふうつと指先についたかすを吹き飛ばして、すこしばかり考え込むそぶりを見せた。

そして、人の悪そうな笑みを浮かべてこういった。

「俺は、そう、アヴェンジャーかな。お前面白いから、いつでも死にたくなったら呼ぶといい。」

「すぐ駆けつけてやる」

「なにそれこわい」

「はいはい、これで気が済んだか？」

「うん。ありがとう、アヴェンジャー」

ひらひらと手を振る彼から目を離して、目の前の光に向き直る。
そしてわたしは、一歩踏み出した。

プロローグ（後書き）

初めてこういうものを書いたので、お見苦しい点が多々あったと思います。

違和感や、こういう語句の使い方はおかしいんじゃないですか？ということがあったら、ぜひコメントしてください。

わたしの家族を紹介します

新しい家族ができて、三年になった。

といつても、できたというのは語弊があるのだけど。できたという言葉は、わたしの両親にこそふさわしいのだろう。

「ごはんよー。降りてらっしゃい」

「あ、はい！」

一階から母さんの声がした。

ばたばたと階段をかけお・・・とと、危ない。三歳児の短い手足では、階段を駆け下りるなんて清水の舞台からひものつかないバンジージャンプをするようなものだ。一段が身長的一半くらいあるので、怖くて仕方がない。

「だいじょうぶ、てつ」

わたしの兄の士郎が心配そうに声をかけてきた。同じようにこわごわ階段を一段ずつ降りながら、ふとい眉毛をへによつとさげる。

わたしはあわてて頭を振った。

「だいじょうぶ！兄さんはだいじょうぶ？」

「だ、だいじょうぶだよ。ぼく三才だし」

そうしてまたそろそろと次の段に足をのばした。

隣の士郎も同じようにしようとして・・・ころんとバランスを崩した。あ、落ちる。

つて、うわあー！

「に、にいさんー！」

「・・・っ」

ぎゅつと目を瞑る士郎。手足も縮めて、まるでだんご虫のようだ。わたしは反射的に手を伸ばしかけて、はたと士郎の後ろにいる人影に気づいた。

「・・・おつし！捕まえたぞー」

「あーお、お父さん！」

ぼすつと重い音を立てて士郎がその人の腕の中におさまる。筋肉質でよく笑うそのひとは、わたしと士郎のお父さんだ。彼は士郎を左脇に抱え直して、わたしに向かって手を差し出した。

「よし、鉄子も来いっ！」

「はい！」

わたしはお言葉に甘えて、父さんへと思いつきりダイブした。

わたしは、気づいたときにはこの家で暮らしていた。

わたしの名前は鉄子。三歳だ。

たぶん、これがあのアヴェンジャーが言っていた、『押しつける』ということなんだと思う。

どこかの家に新しく生まれ直す。つまり、わたしをその家に押しつける。

「・・・ひどい」

「あ、にんじん美味しくなかった？」

「え？あ、ううん、おいしいよ！このにんじんあまいし！」

「そう、良かった。煮るときにちよつとはちみつ使ってみたのよ」

優しく微笑む、このひとがわたしのお母さん。

家事が好きで、料理が好きで、とても優しい自慢のお母さんだ。

ただいかんせん、ちよつと暴力的なところがあるのが欠点だ。まあ些細なことだけど。

前とは違うお母さんを『お母さん』と呼ぶのももう慣れた。最初は違和感があったけど、今はそうでもない。

あの暗闇の中で長時間過ごしたせいだろうか。家族の記憶も、ほかの人たちの記憶もぼっかり穴が開いたみたいになって、思い出すことができなくなっていた。

そういえば、今のわたしの見かけも前とは全く違うものだ。
赤毛に金色がかった茶色の目。兄の士郎とそっくりの色。

ちなみに、母さんもこんな感じ。わたしの家で唯一日本人らしいのは父さんだけだ。

「ん？どうかしたか、鉄子」

「なんでもない」

父さんは鉄鋼関係の工場で働いていて、毎日とてもくさくなって帰ってくる。

夕方「ただいまあ」と帰ってきてすぐに布団に倒れ込もうとするのを、家族みんなで風呂にたたき込むのが、我が家の日課だ。

気さくで、むきむきで、よくいろんなところに連れて行ってくれる、頼れるお父さん。

お母さんに内緒で、スナックだの居酒屋だのに連れてってもらっているのは、父さんとわたし達だけの秘密。

そして、最後。

「（こそこそ）」

「・・・にんじんちゃんと食べなきゃだめだよ」

「う！・・・むー」

わたしの横でにんじんだけ残った皿をつつき回しているのが、兄の士郎だ。

三歳にしてはよくできた兄で、妹のわたしを気遣ってくれるし、誰かをいじめたり、ものを取ったりということもほとんどない。

気弱っていつちゃったからおしまいだけど。でも、とてもいい子だ。

「・・・ねえ、てつはブロッコリーたべないの？」

「むぐ！」

不意打ちが来てのどがつまった。

胸をタツプするわたしを見て、士郎がわたたと水を差しだしてくれた。

・・・んぐぐ。

「・・・ぷー。ありがとう」

「ううん、いいよ。ねえ、もしかしてさ、てつってブロッコリー苦手なんじゃない？」

「うぐっ」

言葉に詰まる。

そう、実はわたしはあの緑色の、もさもさした、わたしの目の前にマヨネーズとともに転がっている、ブロッコリーと呼ばれるキャベツの変種が苦手である。

いや、なぜかってそんな・・・むしろ食べられるという方が不思議というか、あんなの食べてのどに詰まって死んでも知らないよ？という感じというか。

そもそも、もさもさだけならまだいいんだ。味がなから。なんで茎があるんだ？なんでもさもさのあとに野菜くさいのがくるんだ。

もさしゃきつ、みたいな、あのギャップ！初めて食べたときの感覚を、わたしは今でも忘れられない。

ぎええと泣き叫んだあとき。あのぐにやったとした食感・・・。

「てつ？聞いてる？」

「へっ？あ、う、うん、聞いてるよ！」

はっとして士郎に向き直る。

士郎がにこつと微笑んだ。

「ブロッコリー、ぼくが食べてあげる。かわりにぼくのにんじん食べてくれない？」

「なぬ・・・！に、にいさん！なんという策士！」

「ふふん、のこしたらおかあさんがこわいもんね。さくしってなに？」

得意げに胸を張る士郎。

わたしは笑って、ちらつと向かいの両親に目をやった。

・・・お母さんは、とつくの昔に気づいているけれど、見て見ぬふりをしてきている。

父さんも、にこにこことこちらを見つめている。

わたしは言った。

「じゃあ、ブロッコリーと交換ね」

「うん。じゃ、にんじんあげる」

フォークを互いの皿にのばして、そのままぱくりと口にする。

何かが叩くような音がして向かいを見ると、お母さんが両手を合わせていた。

「二人とも、残さず食べたわね。ごちそうさまするわよ」

「ちよ、ちよつと待ってくれよ。まだ俺食べ終わってないぞ」

「もう、さっきからにやにやしてたからでしょう？はやく食べなさい」

あわててご飯をかきこむ父さん。

それを呆れた顔で見ているお母さん。

そしてきょんとしている士郎。

わたしは、嬉しくなって笑った。

この家族が大好きだ。だから、前とは違う、素直ないい子になって喜ばせたいと、そう思った。

わたしの家族を紹介します（後書き）

短かったですね・・・すみません。短いくせにぐだぐだしています。
もし良かったら、コメントや評価お願いします。

はじめてのおつかい 遭遇編

わたしは一人で商店街に来ていた。

お母さんからおつかいを頼まれたのだ。

といつても、三歳児に頼むのだから、ちょっとしたものだけど。
手に持った紙を見て読み上げる。

「ええと、牛肉、にんじん、たまねぎ、じゃがいも。・・・今日はカレーかな？」

ふふ、と思わず頬がゆるむ。

お母さんが作るカレーは、本当に美味しい。自家製で、スパイスから自分で調合して作るから、お母さんにしか作れない世界で唯一、そして世界で一番美味しいカレーだ。

カレーカレー。そういえば、カレーってはじめは辛くなかったって本当だろうか。

「カレーカレー、ふふーん。カレーカレー、らー」

カレーの歌を歌いながらスーパーへむかう。

肉屋さんや八百屋さんもあるにはあるけど、子供の足では遠くてなかなかいきづらいのだ。

三歳児の歩幅は、想像以上にちいさかった。

「ふう、やっとついた。つかれたー」

そびえ立つ自動ドアを前にして、よいしょと買い物袋を抱え直す。

反応してくれないんじゃないかと少し不安になったが、そんなことはなく、普通に通り過ぎることができた。

よし、それじゃあまず、牛肉からかな。

「ええと、なまにくのコーナーはどこなんだろ」

あちこち見渡してみると、ピンク色のパックが並べてあるコーナーを見つけた。

ピンク色というのはもちろん、中身のことだ。

目線が低くてよく見えないけど、あそこだろうと見当をつけててくと歩き出す。

・・・うぎぎ、やっぱり子供ってというのは不便だ。

「う」

「あら、ごめんね」

なぜかって、周りがよく見えないし、周りにも見てもらえないし。小さすぎて気づかないようだ。くそう。

わたしの身長は同じくらいの子供と比べても低いので、仕方がないのかもしれないけど。

苦労して人の波をくぐりぬけ、陳列棚までたどりつく。

ここは割と低めなので、特に背伸びしたりすることもなく中を見ることができた。

「牛肉、これでいいのかな。んっしょつと」

ぽいっと買い物袋に投げ入れ、次は、とメモを見る。
にんじんか。

士郎はにんじんが嫌いだけど、カレーに入ってるのなら食べることができるんだ。

つまりそのくらいお母さんのカレーはおいしい、ということなんだ。へへ、ただの自慢です。

「にんじんにんじん・・・あ、あった」

首を巡らすと、木箱の上に山と積まれたにんじんを発見した。ぐらぐらしていて、今にも崩れそうで怖い。というか。

「と、とどかない・・・」

頂点が高すぎて全然手が届かない。

背伸びしても、はねても、とんでも、手が届かない。

そして、はねたり飛んだりするたびに揺れるにんじんの山がとても怖い。

昼前の忙しい時間帯。

店員さんは皆レジに出払っていて、呼ぶわけにもいかないし、どうしようか迷っていると、

隣でたつと音がした。

「え？」

「っと。はい、これ。これがほしかったんでしょ？」

黒髪の少女が、目の前でにんじんを差し出している。状況がよくわからない。

とりあえずにんじんを受け取り、ぺこりと頭を下げた。

どうも、この少女がにんじんを取ってくれたようだ。

「ありがとう」

「おれいなんていいわ。わたしだって、下心があつてたすけたんだもの」

「したごころ・・・？」

なにか、頼みたいことでもあるのだろうか。

わたしにできることなんて、あんまりないと思うけど。首をひねると、少女はじつとこちらを見ながらいった。

「あなた、このへんのひとよね。花屋を探してるんだけど、どこかしらない？」

はじめてのおつかい 遭遇編（後書き）

毎回ぐだぐだで、申し訳ないです。

終わり方も微妙ですし・・・もっと勉強して、文章うまくなりたいですね。

もし良かったら、評価、感想、よろしくお願いします。

はじめてのおつかい 探し物編

少女の言ったことの意味がいまいち理解できず、首をかしげる。

「花なら、スーパーにもあるよ？わたしにたのまなくても・・・」
「事情ははなすわ。とりあえず、買い物はそれで全部？」

それ、と指さされたのは牛肉とにんじんが入った買い物袋。
首を振ると、少女はこくりとうなずいた。

「手伝うわ。メモを見せて」

そしてメモを受け取ると、一人でさっさと歩いて行ってしまった。
ぽけっとそれを見送って、

「・・・あれ？」

少しの間頭が空っぽになっていたことに気づいて、さっきとは反対
の方向に首をかしげた。

あの少女は買い物を手伝ってくれると言った。

なぜかって、彼女は花がほしかったから。

それで、なんでわたしのつて聞いて、ええと、それから・・・。

「なにやってるの？まだたまねぎとじゃがいも、買わなくちゃいけないんでしょう？」

いつの間にか彼女が戻ってきていた。

目の前で仁王立ち。

「まったく、ぼーっとしないでよ」

口をとがらせて、そんなことを言ってくる。

・・・悪い子じゃなさそうだ。

せつかく手伝うと言ってくれてるんだし、花を探すのを手伝ってあげてもかまわないだろう。

「うん、ごめんね。それじゃ、歩きながらはなそう」

「そうね。たまねぎはあっちよ」

木箱の向かい側を指さして、やっぱり一人で歩き出す。
あわてて追いかけて、後ろ姿に向かって話しかけてみた。

「それで、探してる花って、なんていうの？」

「クレマチスよ」

「くれ・・・まちす？」

そんな花、聞いたこともない。

「どんな花なの？」

「私も知らないの」

「えっ？じゃあ、どうやってさがすつもりだったの」

「花屋でお店の人に聞けばいいっておもってたの。」

まさかないなんて、予想してなかったわ」

積み上げられた木箱を小刻みに揺らし、落ちてきたたまねぎをナイスキヤッチしながら、少女はむうと眉根を寄せた。

たまねぎを受け取りつつ、クレマチスとかいう花のことを考える。

そんな園芸種だか花束用だかも分からないようなマイナーな花が、スーパーにおいてあるはずがない。

少女も、一度聞いてみて撃沈してしまったんだろう。

となると、専門の花屋さんに行くしかないわけだけど。むむ。

「あ、そうだ。忘れてた」

突然、少女が振り返った。

きれいな黒髪がぱつと揺れる。

「あなたの名前を聞くの、忘れてたわ。私は遠坂凜。あなたは？」

「今更だ！あー、えと、わたしは鉄子」

「てつこ・・・ありがと、分かった。私のことは、凜って呼んでくれていいからね。てつこ」

「わかった。ごういんなんだね、凜は」

用は済んだとばかりにじやがいもコーナーへと歩き去っていく背中が変に凜々しい。

わたしはため息をついてその後についていった。

呼び捨てはあんまり好きじゃないんだけどな・・・。

「お母さまが珍しくお花でも買いに行こうかしら、なんて言うからじゃあ私が行ってきます！って出てきちゃったけど・・・早まった

「かもしれないわね」

「え？なに？」

ぼそぼそと呟くが、よくきこえなくて聞き返す。

凜は少し黙り込んだ。

そして、ゆっくりと口を開く。

「・・・私のお母さまね、体が弱い。いつも家の中で家事をしてばかりで。料理するだけでめまいがするようないから。」

そんなお母さまが昨日、花を買いに行きましょって言ったの。

外出なんて、自分からは滅多にしたがらないのに」

「・・・」

「今朝、やっぱり体調を崩してね。だから私が代わりに来たの。」

お母さまの役に立ちたかつたし・・・。けど、だめね。

これだったら、お母さまがよくなるのを待ったほうがよかったかもしれないわ」

さつきまでの、むっとした気持ちが消えていく。

強引なのは嫌いだ。なぜかって、昔のわたしがそうだったから。

でも、彼女の強引さは、強がりなのかもしれないと思った。

いま、少しだけ出してくれた弱さが彼女の本当なのだ。

お母さんのために何かしたくて、けどうまくいなくて。

でも誰かに頼むのはプライドが許さなくて。

そして見つけたのが、同じように困っていたわたしだったのだ。

「そっか。なら、がんばってさがさなきゃ」

「は？何言ってるの？」

「お母さんを喜ばせたいんじゃないの？」

「う・・・」

頬を赤らめて顔を背ける。

それをじっと見つめていると、凜はいきなりガツとわたしのあごを掴んで無理矢理視線の向きを変えさせた。

「いたいでふ」

「う、うるさい！いいからはやく買い物を終わらせて、花を探すわよ！」

そのままわたしの手をひつつかみ、じゃがいもへと引っ張っていく。なんでだろう、顔が赤いけど。

・・・そういえば。

「凜は、スーパーのむかいの花屋には行った？」

「向かいの花屋？そんなものなかったわよ」

「え？そんなはず・・・」

まさかとは思うけど、凜はもしかして、あの花屋を見落としているんじゃないだろうか。

いや、そんなまさか。

はは、もしかしたら、なくなっちゃったのかもしれないし！数分の間に！

そんな訳ないね。

案の定、花屋を見落としていたようだ。

「えー！こんなの、さっき見たときはなかったわよ！」

そんなわけない。

唸る凜に苦笑いを返して、わたしはエプロンを着けた店員さんに話しかけた。

「すみません」

「お？なんだい、おつかいかい？」

「うん、そうなんだ。クレマチスってありませんか？」

「クレマチスかい、ちよつとまってなさいよ」

店員さんがひよつと引っ込んで、植木鉢のあたりをこそそこそとあさり出す。

そうして出てきたのは、きれいな紫色の、風車みたいな形をした花だった。

「ほい、これだ」

「わあ、きれいだね」

「値段はいくらなの？」

見とれるわたしをよそに、凜が単刀直入に尋ねた。
店員さんが植木鉢の下をのぞいて言う。

「んー、千六百円だな」

「せんっ……！だ、だいじょうぶ、凜！」

千六百円なんて、わたしからしてみるとものすごい大金だ。不安になって凜を見ると、財布から一万円札を出しているところだった。

「ぶ……っ」

「それ、六株ちょうだい。これで買えるだけ買ってこいっていわれてるの」

「おお、じゃ、これはおつりだ。ちよろまかすんじゃねえぞ」

「そんなことしないわよ。馬鹿じゃないの？」

凜は小銭を洒落た真っ赤な財布に押し込むと、ばさつと髪をかき上げた。

その仕草がきつちりと似合っていて見とれそうになる。

彼女は植木鉢が入った袋を二つ受け取って、わたしを見て不思議そうな顔をした。

「何やってるの？」

「へ？なにつて」

思わず、ぼーっとしてただけなんだけど。

そんなわたしに、凜は袋を四つ押しつけてきた。

「ほら、あんたが持つよ。手伝ってくれるって約束でしょ」

「ええっ！でも、買い物袋持つてるし」

「わたしはもう両手ふさがってるし。あんたはまだ片手あいてるじゃない」

「なんだってー!？」

片手で植木鉢を四つも持てとおっしゃいますか！なんてあくまだ！
そっこうしているうちに、全部片手に持たされてしまう。

「重いよ。重いよー」

「私の家まででいいから。おつかい手伝ってあげたんだから、おあいこじゃない？」

ふふんと笑う凜。

何を言っても無駄だと気づいて、わたしは肩を落とした。

こうなったら、とことんつきあうしかないか。

颯爽と歩き出した凜を追って、わたしは重い一歩を踏み出した。

はじめてのおつかい 探し物編（後書き）

遅くなつてすみません。

あいかわらず短くてぐだぐだです。改善していきたいです。
もし良かったら、評価、感想、よろしく願います。

たんぽぽの丘（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

一ヶ月・・・本当にすみませんでした。

たんぽぽの丘

それはある日の夜のこと。

小さな地域ニユースで、紹介されたとあるレジャースポット。

「わあ、綺麗ね」

「たんぽぽだらけだー」

そこは、『たんぽぽの丘』と呼ばれる公園だった。

真ん中に大きなたんぽぽの花壇が据えてあり、そこをぐるっと囲むように丘のようになった芝生が植わっている。

最近親子連れの間で人気なのだと、すこしふとめの男性リポーターが笑顔で宣伝した。

『まるで、海の中に太陽が入り込んでいるようです』

『まあ、詩人ですね』

『ぜひこの日曜お出かけしてみてはいかがでしょう。以上、冬木市からでしたー』

「・・・いいかも」

お母さんがぼそつと呟いた。

なにがお母さんの琴線にふれたのかはわからなかったけど、公園には興味があった。

あの芝生の斜面でそりに乗って滑るとか、たんぽぽを引っっこ抜いて

花輪を作るとか、考えただけでわくわくする。

「じゃあいこうよ！兄さんも行きたいよね？」

「うん、いきたい！おかあさん、ピクニックしよう！」

二人で目を輝かせてお母さんを見つめる。

お母さんは眉根を寄せて唸った。

「うーん、でもね、お父さんの仕事が忙しいのよ。なかなか時間のとれなくて。

みんなで行かなきゃ意味ないじゃない？」

「むう、そっかあ」

「じゃあ、らいしゅうは？」

「来週もね・・・ごめんね、今度好きなお菓子一個買ってあげるから、我慢して」

しょんぼりムードが漂ったそのとき、キッチンからひよいと顔を出した父さんが言った。

「いや、今週は大丈夫だぞ」

「・・・えっ？」

思わず目が丸くなる。

お母さんも、士郎も目がコンパスで書いたみたいにまん丸だ。

そんなわたし達にかまわず、父さんは笑顔で親指を立てた。

「母さんにはああ言ってたんだけどな。実は、職場で結構終わらせてきてたんだっ。

今週の土日は空く予定だから、せっかくだし四人でピクニックで
ましょう」

きらきらと父さんの顔が輝いて見える。

というか、後光が差しているようにさえ見える。

わたしは無言で隣の士郎に向き直り、喜びのハイタッチをした。

そうして、日曜日になった。

天気は晴れ！雲一つない青空。
雲量ゼロってやつかな。

「たのしみだね、てつこ！」

「そうだね。あ、兄さん、お母さんのおべんとう見た？すっごくおいしそうだったよ」

「ほんとう？たのしみだなあ」

「たのしみー」

おそろいのつばの広い帽子をかぶり、リュックを背負えば、それで準備は完了だ。

公園は少し遠いけど、車で行くほどでもないので歩いて行くことになった。

「準備できたー？」

「できたよ！」

背後からの声に振り返る。

大きなお弁当箱を持ったお母さんが、父さんと一緒に歩いてくる。

「おとうさん、そりは？」

「あるぞ。ちゃんと作っておいたからな」

士郎が息せき切って尋ねると、父さんは笑って手提げ袋を持ち上げて見せた。

段ボールとビニールひもで作った簡単なそりだ。

昨日の夜、わたしと士郎と父さんの三人でつくった。

・・・ま、わたし達は気づいたら寝ちゃってただけだ。

「それじゃ、行きましょうか」

「れつつー！」

「れつつらごー！」

ごー、にあわせて拳を振り上げ歩き出す。

たんぽぽの丘は、家からすぐ近くの坂を上ったところにある。

地図上で見れば近いのだろうけど、この坂傾斜がきついので子供には少々厳しい。

テンションあげてないとやってられない。

「てつ、しりとしよう」

「いいよー。じゃあ、りす！」

「ま、まだじゃんけんしてないよー」

「あ、ごめん」

長い坂を上っていく。

日曜日なのに人通りは少ない。

みんな土曜日のうちに出かけてしまったのかもしれない。

「さ、さ、さー・・・サンバ！」

「パイナップル。」

「るー！？る、なんて知らないよ」

「あるよ、ほら、国のー」

「ええ？あ、あめりか？」

「ぶぶー。ルクセンブルクでした」

「なにそれー！」

そうこうしているうちに、だんだん公園が見えてくる。

よく見ようと目の前に手をかざすと、士郎も気づいたようで、はしやいだ声を上げた。

「ついた！」

「見えたわね、公園」

お母さんと父さんも追いついた。

・・・お、木陰発見！

わたしはお母さんのシャツの袖をくいつと引つ張った。

「あそこでごはんにしようよ」

「ご飯にはまだ早いわよ。けど、そうね。ちょっと休みましょうか。

二人とも、先に行つててくれる？」

「はい！兄さん、いこう！」

「うん！待ってるねー！」

遠くに見える木まで走り出す。

足を引っかけそうになりながら走っていると、急に士郎が立ち止まった。

「あつ」

「わ、っと。兄さん、どうしたの？」

首をかしげた。

木の方を指さして、残念そうに士郎は言った。

「ひとがいる。べつのとこ行かなきゃ」

「ひと？あれ、本当だ」

士郎の言うとおり、レジャーシートを広げて木陰に座っているひとたちがいた。

四人の、親子連れのようなだ。

確かに、別の場所を探した方がよさそうだ。

ん、けど、あの子供たちのうちの一人、見覚えがあるような気がするけど。

ツインテールの女の子？

「あ、てつ。誰かこつち来るよ」

「え？」

ちょうどその女の子がこちらに向かって駆けてきていた。

見れば見るほど、誰かに似ているような気がしてならない。

綺麗な黒髪、澄んだ青い瞳。・・・え？

「ちよっ、まさかつ」

「てつこーっ！」

「けふっ」

勢いのまま追突され、どつと押し倒される。

地面にぶつかつた衝撃で、頭がくらくらする。

リュックのおかげで、頭は打たずにすんだんだけど。

ちょっと、おなかの中とか凄いことなってるんじゃないだろうか。

「けほ、うぐ、り、凜？」

「てつこ、久しぶり！元気だった？」

「うん、大丈夫だけど死にそうかな」

「まかせて、薬なら持つてるわ。正露丸のむ？」

「えんりよします。おりてください」

凜にのいてもらって、なんとか体を起こす。

立ち上がってズボンから土を払い落とした。

おそるおそる、土郎がわたしの顔をのぞき込んだ。

「てつ、大丈夫？この子だね？」

「あ、兄さんは会ったことないか。凜っていうの。こないだスーパーでもだちになったんだ」

そして凜に向き直り、

「あのね、兄さんの土郎」

「ふうん。しろう、よろしくね」

「あ、えと、よろしく」

土郎はぴゃつとわたしの後ろに隠れてしまった。

緊張しているのかもしれない。

あんまり気にしないことにして、わたしは凜に尋ねた。

「今日は、家族できてるんだ」

「そうよ。そうだ、私の妹も紹介してあげる。ちょっとまってて、

ととっ

「凜、友達かい？」

うわびつくりした！

いつのまにかわたし達の背後に知らないおじさんがたっていた。
お父さん・・・かな。

「あ、父様。すみません、いきなり」

「かまわない。こちらは？」

「鉄子です。よろしく願います」

「し、しろっです」

ぺこりと一礼すると、彼は凜によく似た瞳を和ませた。

「よろしく。ところで、君たちのお父さんとお母さんは？」

「え？そういえば・・・」

辺りを見回すと、すぐに二人を見つけることができた。

呼びかけようと手を振りかけて、やめた。

父さんが眉をしかめて歩み寄ってくる。

「・・・子供たちから離れてください」

「父さん？」

「おや、君は」

強引に凜のお父さんから引きはがされる。

士郎が父さんを見上げたまま動かない。

わたしだっけとそっとうた。

こんなに怖い顔をした父さん、初めて見た。

「子供たちがおびえている。放してあげてはどうかね」
「一体、どういっつもりなんですか！遠坂さん！」

父さんが声を荒げて彼に詰め寄った。

どういっことなんだろう。

怖くて、さっきまでの浮かれた気分はどこかに行ってしまった。
わたしは俯いて、しがみつく士郎の手をぎゅっと握った。

続く

たんぽぽの丘（後書き）

少しずつ書いていて、書いた日も時間もばらばらなので、話がうまくつながっていないかもしれません。

誤字脱字、語句の使い方の間違えなどありましたら、ご指摘よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4086y/>

Fate/and blacksmith

2011年12月20日22時48分発行